

組織目標評価報告書（平成28年度）

部局名：

農学部

部局長名：

門田 充司

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>(1)60分授業及び4学期制の導入に伴う問題点の抽出と改善を行うとともに、授業ピアレビューによる教育の質の向上を図る。</p> <p>(2)グローバル・ディスカバリー・プログラムへの参加に向けて、農学教育のカリキュラムの検討と外国人留学生の受け入れ準備を推進する。</p> <p>(3)生殖補助医療技術教育研究センターと協力し、生殖補助医療技術キャリア養成特別コースの充実を図る。</p> <p>(4)キャリア教育の改善を図るためにアンケートを実施する。また、卒業生へのアンケート等も引き続き実施・分析するとともに、重要なステークホルダーである保護者との懇談会を開催し、学部教育の質の改善を図る。</p> <p>(5)成績不振学生に対する担任・指導教員による指導を引き続き実施するとともに、アカデミック・アドバイザー・アシスタント(AAA)制度を活用し、留年生の減少を目指す。</p> <p>(6)学部学生の学習意欲を向上させるため、優秀な成績等を修めた学生に対して学部長賞表彰を行う。また、学生の英語力強化を目的に、外部英語検定試験のスコアに応じた検定料補助制度を実施する。</p> <p>(7)海外フィールドとの連携による共同実習を推進するための準備を行う。</p>	<p>(1)本年度に導入された60分授業、4学期制の効果と課題について、教員と学生にアンケート調査を行った。その結果、学生の授業に対する理解度や満足度では比較的高い評価が得られたものの、授業への集中力の維持には困難性が報告された。教員からはむしろ体系的な教育が難しくなるなど多くの懸念が寄せられた。今後、新制度の利点が活かせるよう、カリキュラムや時間割での改善が求められている。講義技術の向上に向け、優良講義教員による授業ピアレビュー(意見交換会を含む)を今年度も8回実施し、授業技術の改善に努めた。</p> <p>(2)グローバル・ディスカバリー・プログラム(GDP)への参加に向けて、農学系英語授業科目を決定し、担当体制の整備を進めた。英語での講義科目数は19、学生実験・実習10を用意し、さらに卒業論文研究と演習に多数の留学生を含むディスカバリー生を受け入れるカリキュラムとした。</p> <p>(3)学生の生殖補助医療技術(ART)キャリア養成特別コースへの関心は高く、受講希望学生は昨年度より増加した。</p> <p>(4)卒業生に対するアンケートでは、9割近い学生が本学部の教育に肯定的評価を示した。各学期末での受講生の授業評価アンケートでは、全授業の平均が5段階でほぼ4.0という高い水準を維持した。学生の就職先へのアンケートでは、良好な回答を得た。保護者との懇談会を農学部フェア・収穫祭において実施し、充実した意見交換を行った。</p> <p>(5)成績不振学生や欠席がめだつ学生を抽出し、担任・指導教員による指導を強化した。学習に困難を持つ学生(4名)についてはアカデミック・アドバイザー・アシスタント(AAA)制度による支援を行った。</p> <p>(6)13名の成績優秀者に学部長表彰を行った。検定試験スコアを大幅に向上させた6名に対して語学検定料の補助を行った。</p> <p>(7)グアム:5名、タイ:4名、ベトナム:6名の学生参加で、海外フィールド実習を初めて実施した。参加学生、教員とも充実した活動であると高く評価していた。</p>
	①-2 大学全体への貢献
	<p>全学で取り組んでいるGDPへは、移行教員のみならず学部全体でサポートする体制を整え、大学院進学をも想定したカリキュラムの充実を行うなど、その運営や入試、広報に積極的に貢献している。また、ARTキャリア養成特別コースでは、岡山大学が中心となってカリキュラムの標準化や教育コンテンツの充実、全国ネットワークの構築等に努めた。</p>
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>(1)留年生を、同年度入学の卒業予定者の10%以内に止める。</p> <p>(2)外国人教員等の目標値を35名(平成27年度32名)とする。また、平成28年度の女性教員目標値7名(同6名)に向けて採用の準備を行う。</p>	<p>(1)平成25年度入学生の留年生は10名であり、入学者の10%以内の目標を達成した。</p> <p>(2)平成28年度の外国人教員等の実績は35名であり、目標を達成している。また、平成29年4月1日付けでWTT教員1名の採用が決定しているため、女性教員の実績は7名となり、目標を達成することになる。農学部にはWTT教員の1/4が所属し、女性研究者の育成に大きく貢献している。平成29年度も数件の申請予定がある。</p>
②研究領域	自己評価
②-1 目標	②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>(1)科学研究費補助金、受託研究費等の外部資金獲得に向けた積極的な取り組みを図る。</p> <p>(2)学部内外における共同研究や地域と連携した研究活動を推進する。</p> <p>(3)資源植物科学研究所とも協力し、これまで実施してきたアジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流を進展させるとともに、アジア・アフリカ関連の共同研究や共同プログラムの実施を推進する。</p> <p>(4)産学官連携推進協議会及びNPO法人「中四国アグリテック」との連携を基に、農学部教員の産学官連携研究を推進する。また、外部資金獲得のため、各種外部資金獲得セミナー等への積極的参加を促す。</p> <p>(5)生殖補助医療技術教育研究センターと連携し、生殖補助医療技術を含む生殖科学に関する研究活動を推進する。</p> <p>(6)学部長裁量経費等を有効に活用し、若手研究者の育成が図れるよう、効果的かつ戦略的な予算配分を行う。また、WTT教員(1名)のテニュア取得に向けた研究・教育をバックアップするとともに、新たな女性教員採用の準備を行う。</p> <p>(7)教員の資質向上を図るため、海外派遣や語学研修を推進する。</p>	<p>(1)全構成員に科研費申請を促し、ベテラン教員による若手教員の申請書の添削を行った。また、ARTセンター教員の教材開発に関わる申請をサポートした。</p> <p>(2)四者協定(岡大、岡山JA中央会、中四国農政局、岡山県)による産学官連携推進会議では、実践型授業や研究成果発表会等を実施した。植物研との合同セミナーを開催し、人的交流を推進した。「知恵の見本市」で5名の学部教員が情報発信を行った。</p> <p>(3)アジア・アフリカ諸国との国際学術交流等を推進した。植物研と連携し、日本学術振興会からの支援により、森田学長、農学部教職員5名がジョモケニア農工大学、マケレレ大学に赴き共同セミナーを開催した。農学部でジョモケニア農工大学との交流セミナーを開催した。</p> <p>(4)「アグリビジネス創出フェア」で教員4名が産学官連携に取り組んだ。岡山県との共同研究「輸出ニーズに対応したモモ新品種の開発」や「優良モモ苗木の開発」で大きな成果をあげた。また、NPO法人「中四国アグリテック」と産学官連携による研究活動を推進した。</p> <p>(5)ART教育カリキュラムの標準化に向けた活動を行った。また、リカレントセミナーを日本各地で開催し、教育活動を行った。</p> <p>(6)1名のWTT教員採用に際し、育成環境を整えた。</p> <p>(7)3名の若手教員の海外派遣を行った。</p>
	②-2 大学全体への貢献
	<p>(1)四者協定による研究活動・教育活動を積極的に展開し、農学部の認知度を高めた。</p> <p>(2)岡山県と取り組んだ果樹に関する共同研究で大きな成果をあげた。</p> <p>(3)若手教員の海外派遣や英語研修に取り組み、SGUプログラムに貢献した。</p>
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>(1)科学研究費補助金の申請については、(新規申請者数+継続件数)/教員数×100の値が100%を越える状態を維持する。</p> <p>(2)共同研究費・受託研究費について、30件以上の獲得を目標とする。</p>	<p>(1)H28年度時点で科研費を保有しておらず、かつ科研費申請を行っていない教員(退職間近・病氣療養中の教員含む)は9名(20%)に留まった。また、申請の実績は目標値を超える130%となった。</p> <p>(2)共同研究費・受託研究費については、35件(延件数45件)、受入金額は1億2,420万円(延金額1億5,442万円)に達しており、外部資金獲得に向けた自助努力が反映された。</p>

③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標 (1)農学部附属山陽圏フィールド科学センター販売所や各種イベント等での農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員へ、新鮮で安全・安心な農作物を提供するとともに、農学・農業の重要性を社会へ発信する。また、それらの諸活動を通し、地域社会への貢献を推進するとともに、地域農業の活性化に努める。 (2)「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」、中四国大学連携フィールド演習等の双方向型の講義・実習科目を開講し、人的交流を通じた地域活性化に教職員と学生が積極的に関与し、貢献する。また、農学部フェアと同時に開催の収穫祭における学生支援を積極的に行い、学生と社会との交流を推進する。 (3)グッドジョブ支援センターとの連携を強化し、引き続き「農業による福祉的雇用の促進」・「福祉的農業の確立」のためのプロジェクトを推進する。 (4)農学部および農学部附属山陽圏フィールド科学センター主催の公開講座において、児童・生徒あるいは一般市民に農学のフィールドを実際に体験してもらうとともに、農学部フェア等においても、農学の広報に努める。 (5)津高牧場の国際共同利用を推進するための準備を行う。	③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組 (1)フィールド科学センター(FSセンター)では、販売所、大学生協、天満屋、Jテラスやホームカミングデーにおける農産物販売を引き続き実施し、地域への情報発信や地域交流を推進した。また、津高牧場で生まれた優良な牛を「千屋牛」として販売開始した。 (2)「農家体験実習」や「農学部シンポジウム」等の実践型授業やイベントを国・地方自治体・地域農業者等と連携して開講した。また、AGORA教員と連携して「地域活性化システム論実践」を新たに開講し、全学の教育に貢献した。更に、大学コンソーシアム岡山の開講科目「晴れの国岡山 農場体験実習」では、他大学からの学生も積極的に受け入れた。 (3)農産物販売を拡大し、グッドジョブ支援センターへ販売委託を継続することで「農業による福祉的雇用の促進」および「福祉的農業の確立」を推進した。 (4)農学部公開講座、FSセンター公開講座及びジュニア公開講座の3公開講座並びにひらめき☆ときめきサイエンスを開催し、地域貢献を推進するとともに農学の広報に努めた。また、収穫祭やシンポジウムを通して、農学・農業の重要性を社会に発信した。 (5)海外フィールド実習相手校であるベトナム・ノラム大学での実習を機に共同利用の協議を開始した。 (6)FSセンターで2月に発生した除草剤の誤使用への対応策として、技術職員等の研修及び自己学習機会を増強し、組織的な事故発生防止のための制度整備を進めている。
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標 (1)山陽圏フィールド科学センターにおいて、大学間の共同利用実習を提携2大学と継続する。また、中四国大学連携フィールド演習2科目を開講する。 (2)大学コンソーシアム岡山で「農場体験実習」を開講し、農学系以外の学生の受講を推進するとともに、「農家体験実習」等の双方向型の科目を開講し、地域農業者との交流を図る。 (3)農学部及び山陽圏フィールド科学センターにおいて、3課題の公開講座を実施する。	③-2 大学全体への貢献 (1)日本学術会議と共同開催した「農学部シンポジウム」では、前農林水産副大臣を講師に招き、農林水産業活性化を通じた地方創生に係わる農学部の役割と意義についての議論が展開され、農学部の積極的な姿勢が浮き彫りになり、ロールモデルとして政府内に伝わることが期待される。 (2)岡大ブランドに「岡大農場出身“千屋牛”」が加わったことで、岡大の研究成果を一般市民にも分かる形の「見える化」が推進された。
【総括記述欄】 教育に関しては、今年度から導入された60分授業・4学期制の問題点の抽出と改善を行うため、教員と学生を対象としたアンケートを実施し、分析を進めている。また、授業改善のためのピアレビューでは、授業終了後に意見交換を行い、各教員の授業のブラッシュアップの参考に役立っている。その効果として、授業評価アンケートの評価も全体として徐々に向上している。GDPIに関しては、農学部は積極的に貢献する方針を出しており、専任教員を交代することや学部教員による複数の授業履修によって、学生は農学の多様性を学び、卒論は学部学生と同様に研究室で行う。これにより大学院進学率の向上も期待できる。全学的な取組である外国人教員等や女性教員数も目標を達成している。農学部はWTT教員の1/4を受け入れており、本学における女性研究者の育成に大いに貢献している。また、学生派遣、留学生受入の準備として、海外の大学と連携した実習を開始した。研究に関しては、四者協定等による共同研究の推進や果樹を対象とした研究で成果を出している。また、科研をはじめとする外部資金の獲得のための自助努力を行っている。社会貢献としては、公開講座や農学部シンポジウムなどを強化し、農学に関する情報発信と広報を行った。また、津高牧場で生まれた優良な牛を「岡大農場出身“千屋牛”」として販売開始し、岡大の研究成果の「見える化」を推進した。一方、薬剤散布ミス等の再発防止を目的に、今後は研修会や勉強会を開催し、コンプライアンスの遵守を徹底する。	③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況 (1)中四国大学連携フィールド演習2科目(他大学受講生各20名)と「ひらめき☆ときめきサイエンス」(小中高生15名、保護者5名参加)を開講した。共同利用実習については、先方の事情によりくらしき作陽大学とのみ実施した。 (2)「農場体験実習」、「地域農業活性化論」を開講して他学部生の受講を推奨し、「農家体験実習」等の双方向型科目を通じて地域農業者や行政機関等と学生との交流を進めた。 (3)農学部及びFSセンターにおいて、3課題の公開講座(受講者計62名)を実施した。